

ブーレーズの作品

二重の影の対話

1982～85 年にかけて作曲され、盟友ルチアーノ・ベリオに献呈された。もともとなったのは 68 年に完成した無伴奏クラリネットのための作品《ドメヌ》で、その後いくつかの異稿や改訂が行なわれるなか、本曲が生み出された。ソロ・クラリネットの生演奏と、事前に録音され、様々な処理が施されたクラリネットの音とが「対話」する。タイトルは、フランスの劇作家・詩人ポール・クローデルの 11 時間にもおよぶ長大な戯曲《繻子の靴》中にある「二重の影」のシーンから採られている。

12 のノタシオン

弱冠 20 歳のブーレーズによる最初期のピアノ作品で、1945 年の作。タイトルが示す通り、12 音、12 小節、1 分前後のきわめて短い 12 の小品から構成されており、12 音列にもとづく一種の変奏曲とも言える。各小品には、メトロノーム表示ではなく、言葉による指示が与えられている。長らく存在を忘れられていたが、1970 年代後半に再発見され、のちに 12 曲の中から 5 曲がオーケストラ用に編曲された。

アンシーズ

ピアノ独奏曲としては 1960 年代から 30 年ほどのブランクを経て、93～94 年にミラノのウンベルト・ミケーリ国際ピアノコンクールの課題曲として作曲された。「アンシーズ」は文法用語で「挿入節」を意味し、強いコントラスト、激しく変わるテンポの中に投げ込まれるように様々な要素が立ち現れる。二度の改稿を経て、現在は 2001 年版が出版されている。また 1996～98 年には、この曲の素材にもとづいて 3 台のピアノ、3 台のハープ、3 人の打楽器奏者のための「シュル・アンシーズ」が作曲された。

アンテーム 2

独奏作品の拡張と改訂は、ブーレーズの作曲過程において常套的で、ピアノ小品《アンシーズ》が、のちに三種の共鳴楽器による大規模作品へと変貌を遂げたのと同様に、1991 年に書かれた無伴奏ヴァイオリンによる小品《アンテーム》は、97 年にライブ・エレクトロニクス(電子音響)を伴う作品《アンテーム 2》へと生まれ変わった。ヴァイオリンの演奏がコンピュータによって処理され、スピーカーから出力される。演奏者は自分だけでなく、電子音響によって拡張された空間と対話することを求められると同時に、現代的なコミュニケーション体験を聴衆と共有するのである。